〔対馬〕等が著名である。

注(3) 徳川幕府が、はじめ大学頭林衡〔述斎〕を総裁として成島司直〔もとなお〕らに撰述させたもので、家康から10代家治に至る間の編年体実録。文化6年〔1809〕起稿、嘉永2年〔1849〕完成。全516巻。 なお、幕末に本書に次いで家斉から慶喜に至る間の実録を編纂した「続徳川実紀」がある。正・続とも活字化されて「国史大系」（黒板勝美編）に収めてある。実録とは、編年体史籍の一種で君主の一代の事跡を年代順に記したものをいう。

注(4) 島原の乱。寛永14年〔1637〕天草及び島原の天主教徒の起した内乱。益田（天草）四郎時貞を首領とし、3万7千の信者が島原城に拠り幕府の討伐軍に抗戦した。幕軍は大いに苦戦し将板倉重昌は戦死。その後老中松平信綱が九州諸大名を指揮して翌15年島原城を落した。

注(5) 島原は天草とともに雲仙の火山灰地で不毛に近く、ここを統治する大名も領民も、ともに苦しかった地方で「難治の地」と称せられた。高力忠房は、特に島原の乱による物心壊滅の跡を治めるに堪え得る者として譜代大名中から選抜されたのである。寛永15年4月13日任命、11月6日領地に入った。

注(6) 仙台に蟄居中は廩米千俵を扶助されていた。高力左近の死去について「肯山公治家記録」後編巻之4の延宝5年正月3日の条に次の記事がある。『○配流高力左近殿臘月廿五日病死、即チ柴田中務朝成注進ス、臘年廿九日晩到着〔江戸、綱村参覲中〕歳暮年始ニ因テ聞達セス今朝言上ス、大条監物ヲ以テ正則朝臣〔相模小田原藩主稲葉正則、綱村夫人仙姫の実父、幕命による綱村の政治指南〕へ達セラレ島田出雲守殿ヲ以テ老中へ披露セラル』。なお、高力家は延宝8年〔1680〕赦免され3千石の旗本として家名再興した。

注(7) 毎月定例の大名の江戸城登城日。毎月1・15・28日を「月次御礼」の日と定められていた。

資料 厳有院殿御実紀巻36

寛政重修諸家譜巻511

島原半島史中巻（林　銑吉編）

廃絶録中巻

藩翰譜巻11（新井白石）

37. 大泉茂基の略歴

問 大泉茂基の略歴をお知らせください。M図書館にたずねても回答を得られませんでした。

答　大泉茂基は、すぐれた才能をもちながら、貧窮と病苦のうちに、その大成を見ずに病歿した、詩人版画家です。大正2年6月11日、柴田郡船岡〔現柴田町〕の素封家、大泉宗七郎の長男として生れました。幼少の時母を失い、祖母と父の手で育てられました。父は内村鑑三に私淑し、熱烈なクリスチャンであったため、茂基も日曜学校に通うなどして、宗教的な雰囲気に触れて成長しました。そして、白石中学〔現白石高校〕に入ってからは、詩作と版画に親しみ、山と音楽を愛するようになりました。蔵王にはよく登り、陸上競技部の選手となるほどのスポーツマンでもありました。しかし、20才前後の頃から試練の生活が始まりました。大宗と呼ばれ、仙南屈指の富豪だった生家の没落にあい、また肋膜をわずらって、東北学院文科を中退しなければならなくなったのです。けれども、この困難な時期に入ってから、他の多くの薄幸な天才達がそうであったように、茂基の詩と版画とは豊かな展開を示し始めたといわれます。茂基は、ダンテ・ヘルマンヘッセ・リルケ・ロマンローラン・ランボー・ニーチェ・ホイットマンなどの詩に学び、ゴッホ・ブラック・ルオー・中村彝〔つね〕・長谷川利行の作品に親しみ、生活苦に追われながら研鑽をつづけ、昭和24年に詩と版画の自家版「けやき」を出版しました。

昭和29年、船岡から仙台に転居し、仙台中央放送局の臨時雇で薄給を得たり、遂には東一番丁で屋台店を開業したりの苦しい生活の中で、茂基は版画の制作を続け、すぐれた作品を次々と個人誌の誌上や、個展で発表して行きました。しかし、その天才的な才能がようやく世の注目を集めてきたとき、不幸にも胃癌のため、昭和35年1月22日、国立仙台病院で46才の生涯を終りました。

資料　大泉茂基氏追想の記（村上淳、「日曜随筆」第67号の内）
　　文芸東北第2巻3、7号
　　非を非とする（相沢源七）

38. 名取春仲のこと

問　私は佐々木実由〔さねよし〕の子孫です。佐々木実由については「仙台人名大辞書」に次のように書かれていますが、その師名取春仲のことは、この辞書に全く記載されていません。仙北地方の何処だったか忘れたが、「名取春仲の碑」の前を車で通過したことがあります。いろいろ別の本でも調べていますが、どうしてもわかりません。名取春仲とは、どういう人ですか。

「仙台人名大辞書」『佐々木実由。筆道家。字は自光、羽黒派の修験にして春龍専神道居と称す。名取春仲に就て書道・天文・兵法等を学び、私塾を開(1)きて子弟を教授(2)す。慶応三年〔1867〕四月二十日歿す、享年六十三。』